



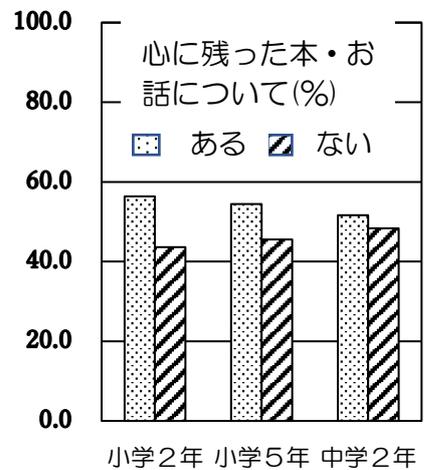
開成町子ども読書活動のアンケート結果をお知らせします。

開成町子ども読書活動推進委員会

令和2年7月に、小学2年生2校177名、5年生175名、中学2年生152名を対象として読書活動に関するアンケートを行いました。結果がまとまりましたので、お知らせします。
※「本を読むこと」とは、歴史マンガ・学習マンガや電子ブックなどを読むことを含む

設問1 今まで読んだ(読んでもらった)本や絵本の中で 心に残っている本やおはなしはありますか。

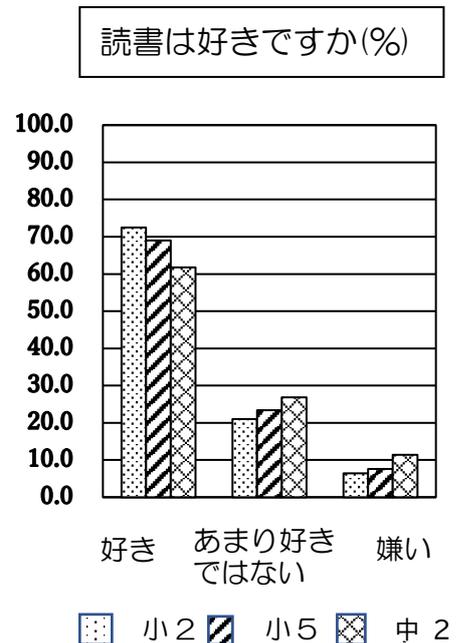
半数以上の子どもたちが、「心に残っている本やお話がある」と答えています。低学年が高めなのは、幼児期の家庭等での読み聞かせ経験や学校での音読等の取組みを通して読書の機会が比較的多いことが一因と思われます。また、心に残っている本に、国語教材の「スイミー」を挙げている2年生が多いだけでなく、5年生になっても「スイミー」を挙げたり、中学生が「ごんぎつね」と書いたりしていることを考えると、学習を通して内容を詳しく読み進めたことが心に強く残る要因となっていると思われます。また、全学年を通して、現在人気のアニメシリーズが心をとらえていることが分かりました。



設問2 読書(本を読むこと)は好きですか。

6割以上の子どもたちが「読書が好き」と回答しています。これは、ブックスタートの取組みや幼稚園・保育園での読み聞かせ活動により、本に興味を持つ場が用意されていることや、小中学校で朝読書を行い、本に親しむ機会を積極的に設けていることの影響が大きいものと思われます。

一方で、「あまり好きではない」「嫌い」が、学年が進むに従って増えています。その理由として「ゲームや外遊びが楽しいから」「文字数が多く細かいので読みにくい」「話が長く途中であきてしまう」などの記述がありました。低学年の頃の「好き」という感情を継続させるためには、学年に応じた本選びの工夫や働きかけ方の工夫も必要になってくると考えられます。

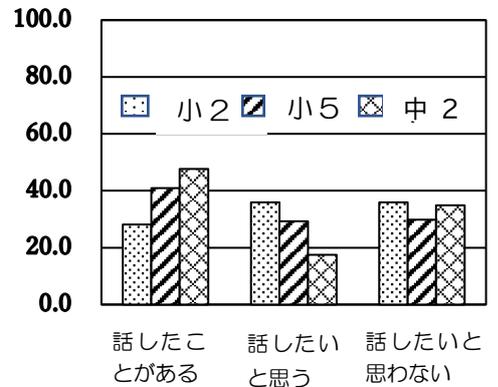


設問3 本を読んだとき、読んだ本のことを誰かに話したり、誰かに話したりしたいなど思ったことがありますか。

読んだ本の内容を「話したことがある子」「話したいと思う子」を合わせると、小学生は70%を超し、中学2年生は70%近くいます。読後の感情や得た知識を自分の中で再構築して誰かに話し、共有することの楽しさを感じていることが伺われます。

一方、「話したいと思わない」と、約35%の子が回答しています。話し合うための時間や場などが学校や家庭で不足していたり、自分の思いを言葉にしたりすることへの抵抗感等もあるのではないかと推測されます。

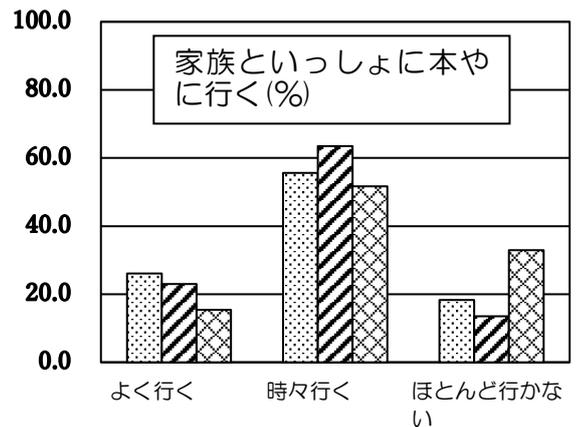
本のことを誰かに話したり、話したりしたいと思う(%)



設問4 家族といっしょに本やさんに 行くことは ありますか。

読書が好きな子は、家族と本やさんに行く傾向が高いと思われます。中学生の回答が「よく行く」「時々行く」を合わせると、70%近くあることは、家庭の支援が大きいことを伺わせます。

本やさんで取り扱う本は、小説・学習資料・雑誌・マンガ等 種類が多いので、今後それらについても調査できたらと考えています。

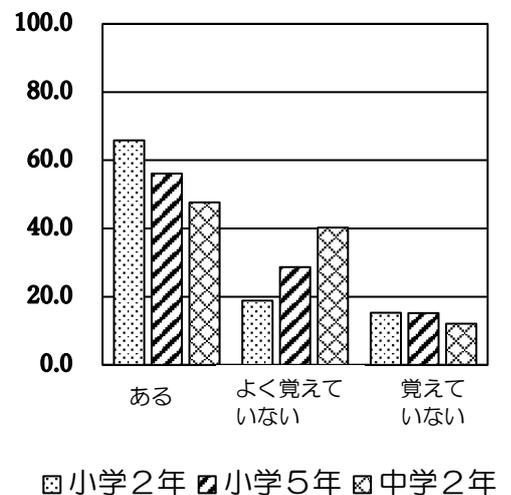


設問5 家で 本や絵本の読み聞かせを してもらったことが ありますか。

家での読み聞かせの経験があると答えた割合は、2年生で66%、5年生が56%、中学2年生が48%となっています。これは、ブックスタートを始めとした乳幼児に対する本の紹介や健診時の読み聞かせなどの取組みが効果を上げていることが考えられます。

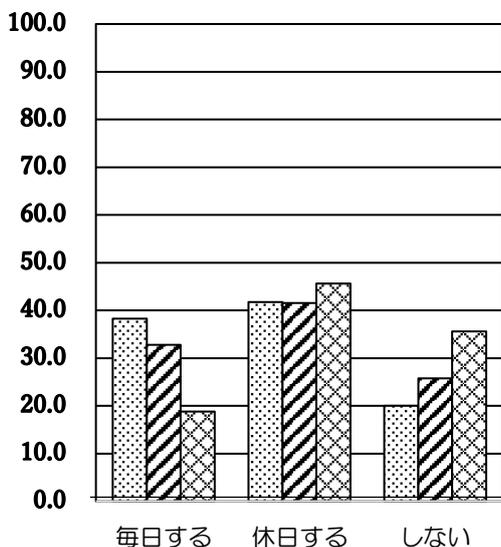
今年はコロナ禍もあり、直接の読み聞かせ活動などは中止にしていますが、発達段階に適した本の送付やリーフレットの配付などの継続的な取組みをしています。「読み聞かせ」は、親子の心のふれあいや絆をさらに深める機会となっていくとともに、子どもの豊かな心と生きる力を育む財産となっていくものであるという認識を持ち、今後も引き続き取り組む必要があると考えます。

読み聞かせの経験(%)



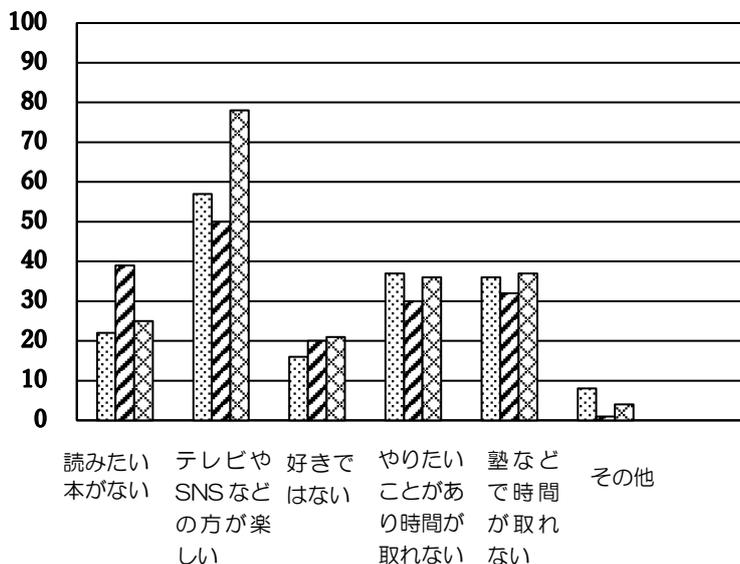
設問6 家で読書をしますか。

家で読書をする(%)



■小学2年 ■小学5年 ■中学2年

家で読書をしない理由(複数回答人数)



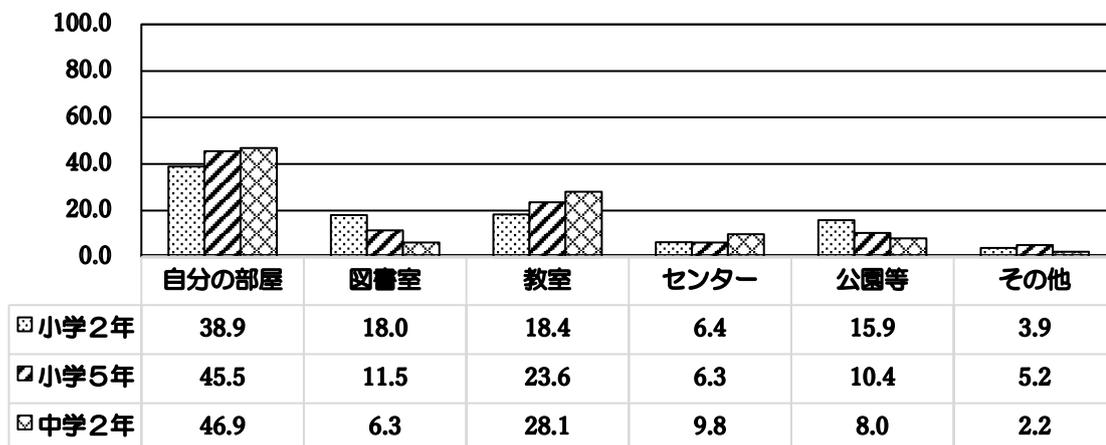
■小学2年 ■小学5年 ■中学2年

家で読書をする割合は、学年が進むに従い少なくなっていく傾向が見られます。これは、全国的な傾向でもあります。その理由としては、「テレビ、ゲーム、動画、SNSの方が楽しい」「宿題や勉強、塾、習い事等で時間がとれない」等が多くを占め、その他として、「運動の方が好き、他にやりたいことがある」「目が疲れる」などがありました。

この傾向は、昨年度まで、5年生以降に顕著に表れていましたが、今回は、そんなに大きな差はありませんでした。2年生は「毎日読書をする」が30%下がり、塾などで時間が取れないが20%上昇しています。低学年も、多忙のため、家で読書する機会が減ってきたことが考えられます。また、低学年にも興味の範囲が広がってきたととらえることもできます。

設問7 どのような場所で読書(本を読むこと)をしたいと思いますか。

読書をする場所(%)



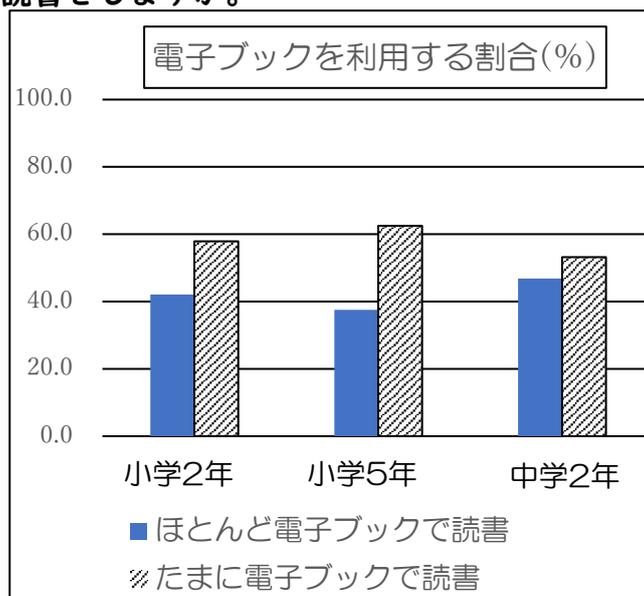
読書をする場所として多かったのは、自分の部屋、教室、図書室の順でした。本を読みやすい環境が子どもの身の回りであることを示しています。中学生になると、町民センターの図書室が他学年よりも多くなっています。その中に電車の中というのもありました。習い事等に通う間に読書をしている様子が伺われ、読書をしない理由の中にある「時間がとれない」中でも、時間を見つけて読書をする姿が見て取れます。

設問8 電子ブックを使って、読書をする人にうかがいます。(利用しない人は、答えなくてよいです。) どのくらい電子ブックを使って読書をしますか。

昨年度は、「たまに電子ブックで読書する人」は、20%程度でした。また、「ほとんど電子ブックで読書する人」は、一人もいませんでした。わずか一年で電子ブックを使用している人が急激に増えていることが分かります。

今後は、さらに増えることが予想されます。

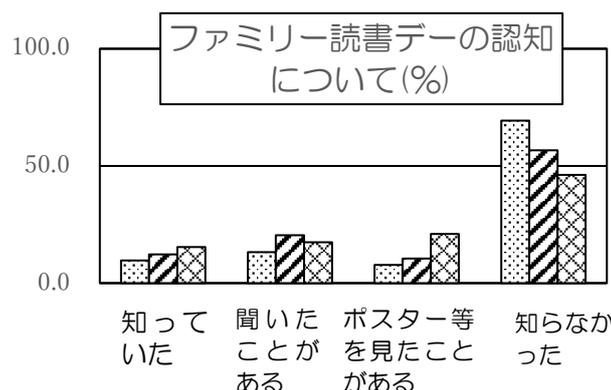
開成町では、今年から一人一台タブレットを配付しますが、「読書」についてどのように活用するかについては、今後の重要な課題となると思います。



設問9 開成町では、「ファミリー読書デー」という日を決めています。この日は「どの家庭も、家族みんなで、本を読みましょう」という日です。この日のことについて おたずねします。

今年度の大きな特徴として、ファミリー読書デーを知らなかった2年生が昨年度と比較して20%増えていることが挙げられます。これは、年度当初の新型コロナウイルス感染症防止による一斉休校や分散登校などの影響で学校での活動や働きかけが思うように進まなかったことが要因ではないかと思われます。

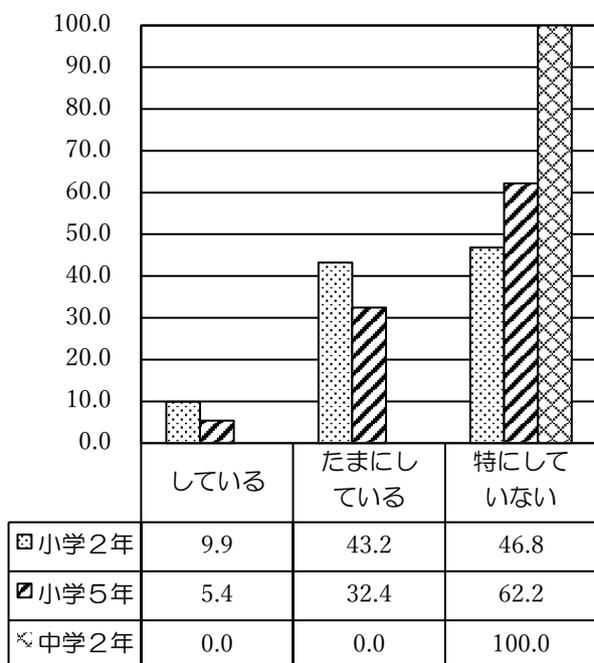
小学校・中学校では、毎年ファミリー読書デーポスターを募集し、応募した子にはポスターに掲載するなどの取組みを行っています。また、町民カレンダーにも掲載しています。しかし、知らなかった子が小学生で半数以上、中学生でおよそ半分います。行動に移すにはまず知ることです。「のぼり旗」を作成するなどしてさらに周知を図る必要があります。



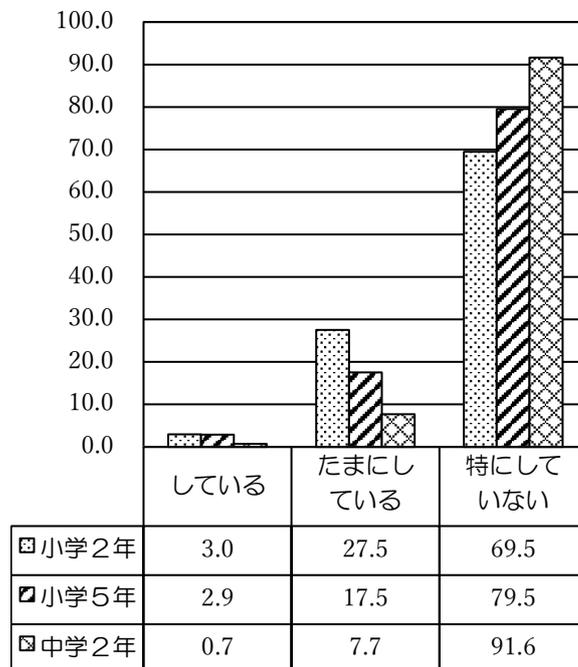
	小2	小5	中2
毎月1日が読書デーを知っている	9.6	12.3	15.4
読書デーを聞いたことがある	13.3	20.5	17.5
読書デーについて見たことがある	7.8	10.5	21.0
読書デーを知らなかった	69.3	56.7	46.2

設問 10 あなたの家では、ファミリー読書デーに、家族みんなで本を読んだり、本の話をしてしたりするなど、読書に関係することを何かしていますか。

令和元年度・読書に関係している活動(%)



令和2年度・読書に関係している活動(%)



小学生の家での活動は、昨年と比較すると、「読書に関係していることをしている」が減り、「特にしていない」が大きく増えています。感染症対応で、家庭生活のあり様が変わったことが影響したと考えられます。

しかし、5年生で見ると、問9で12.3%(21人)がファミリー読書デーを知っていると答えているにもかかわらず、問10では17.5%(30人)が「たまに読書に関する活動をしている」と、答えを出しています。読書に関する活動をしている人が30人いるのに、ファミリー読書デーを知っている人が21人しかいないというのは矛盾した答えです。ファミリー読書デーにおける活動と通常の活動とを混同していることも考えられるので、設問方法にも検討の必要があると思われます。

一方、昨年ファミリー読書デーに、家族みんなで本を読んだり、本の話をしてしたりすることがなかった中学生が、今年は8.4%(12人)、何らかの取組みを行っています。問9では、15.4%つまり、23人がファミリー読書デーを知っていると答えているので、そのうちの半分が取組んでいることとなります。取り組んだ内容についても、今後アンケート内容に加えるなどの設問の工夫も必要だと考えています。

まとめ

1 成果と課題

全国的に見ると、不読率(1ヶ月に1さつも本を読まない割合)は、低くなっています。

開成町の子どもたちの不読率も、各学校の読書活動資料(令和2年9月調べ)によると、平成28年度は全体の29%でしたが、昨年度は19.9%と低くなっています。つまり、1冊も本を読んでいない子の数は年々少なくなってきたということです。

また、学校の図書室での一人あたりの貸し出し数は28年度の平均21冊から昨年度は25冊と増加し、小学生で一人あたり300冊以上、中学生で150冊以上借りている子もいます。一人あたりの貸し出し数が、10倍以上の開きがあることから、読書をする子としない子の読書量の差が大きくなってきたことが今後の課題としてあげられます。

2 コロナ禍にあって

今年度は、前述のように感染症対応で、学校の図書室、町民センター図書室も利用することができない時期がありました。大勢が本を手にとり、楽しく読んだり、語り合ったりすることが難しい状況にありました。その影響がアンケートの結果に影響しているのではないかと考えられます。

開成町では、第三次子ども読書活動推進計画を昨年3月に策定しました。この計画の主旨は「社会の変化や発達段階などに即した読書計画」をキーワードとして、開成町のすべての子どもが、あらゆる機会と場所において、自ら進んで読書活動を楽しむことができ、豊かな心を持った子どもたちに育っていくよう、家庭、地域、園・学校と行政、それぞれが連携し合い、取り組んでいこうとするものです。

今年度、コロナ禍の中で、学校・園では、ソーシャルディスタンスを意識しながらの図書室の再開や各教室で貸し出しをするなどの工夫を重ねてきました。子育て健康課では、関連機関や講師と協働することで、妊娠期から乳幼児期にかけての読み聞かせの大切さを伝え、健診時に配布するリーフレットの見直しや7~8か月児への絵本の郵送などの取組みを行いました。教育委員会では、読書つうちょうを作るための新たな説明書の作成やポスター出品者に対して出品証を出すなど、取組みの見直しを図りました。

それらの成果は、すぐに出るものではありません。

しかし、「丁寧で地道な取組みを継続することによって、読書好きな子どもたちが育つ」ことを信じて取り組むことが必要だと考えます。

読書は、言葉を通して思考力や表現力を養い、豊かな感性と創造力、コミュニケーション能力の基礎を養います。そのため、幼児期から、発達段階に応じた読書習慣を形成することが大切であることを改めて考えたいと思います。

3 紙の本から電子ブックへ

今年度は、コロナ禍をきっかけに、授業方法や教材・教具が大きく変わった年になりました。電子黒板が導入され、問 8 に見られたように、電子ブックを使用し読書している子も現れてきました。これを機に「読書」についても、紙の本から電子ブックへの転換をどう図るか、あるいは紙ベースの本の良さをどう維持していくのか等、様々な課題が生まれることが考えられます。これらは今後の大きな課題となりますが、開成町子ども読書活動推進委員会を中心に、子どもにとってどうあるべきかという視点を大切に検討していくことが重要だと思います。

4 子どもからの要望

最後に、子どもたちの自由記述に書かれていた要望を紹介します。「広くて落ち着ける空間がほしい」「楽しくわくわくする本が増えるとよい」、「シールをもらえたらうれしい」など、子どもたちなりの読書の願いや意欲を感じられる記述が多くありました。

来年度は町民センターの図書室等の環境が改修される予定です。来年度以降、笑顔を輝かせながら子どもたちが町民センターを利用することを願いたいと思います。